漱石の科学への関心

小　山　慶　太

Sōseki's Interest in Science

Keita KOYAMA

Abstract

Sōseki took an extraordinary interest in sciences as a literary man. For example, we can see his tendency in the Law of Gravitation written in *Wagahai wa Neko dearu* (*I am a Cat*), the Pressure due to Radiation in *Sanshiro* and the discussion with physicist, Torahiko Terada. Using such examples, I will survey how Sōseki fused Science and Literature, which are regarded as Oil and Water, in his novels.

早稲田大学の小山でございます。「漱石の科学への関心」という、たぶん漱石研究者では誰もアプローチしない話を今日はしようかと思っております。ここにお集まりの皆さんはおそらく例外なく漱石の大ファンなんだろうと思います。わたしも、漱石研究の専門家ではありませんが、ファンとしては人後に落ちないと自認をしております。そのファンの方たちを前に今日はいささかショッキングな話を致しますので、どうか覚悟をしてお聞きいただきたいと思います。

漱石は寺田寅彦との交流やロンドンに２年間留学した体験を通して科学に対する関心を大変深めました。その知識は文学作品の中にも使っております。すぐ思い浮かぶのは、『猫』の中に出てくる水島寒月という物理学者の首縊りの力学というのがあります。それから、ニュートン力学の話なんかも猫に語らせてます。猫がニュートン力学語るんですから、たいした猫だなあと思いますけども、そういうふうに科学を作品の中に使ってるんですが、１つものすごい失敗をしたことがあります。それは、文学の研究に科学の研究方法を取り入れるという、大変無謀なる試みをしたことです。あとで本人も失敗をしたことには気がつくんですけれども。

漱石は朝日新聞に移る前ですけれども、東京帝国大学で文学の講義を行い、それを文学論と文学評論という２つの著作にまとめております。

そのベースにあるのは、文学の研究と科学の研究を対比する、さらに敷衍して文学研究をサイエンティフィックにやろうとした試みです。これは一種の妄想にかられたわけです。ご承知だと思いますけれども、せっかくロンドンに留学しながら漱石は、英文学の研究に行き詰まっちゃうわけです。泥沼の中でもがくような袋小路に入っちゃうような苦しみを味わうわけです。そうなると、どっかに活路を見出したくなるわけです。こういう表現、お読みになったことあると思いますが、「文学書を持って文学の研究をするのは血で血を洗うようなものである」と。つまり、無駄であるということを言ってます。「無駄である」っていうぐらいならいいんですけれども、血で血を洗うっていうのはいかにも毒々しいというか、禍々しい表現だと思います。つまり、そのぐらい切羽詰まっちゃった。そこで、どうしたかって言うと、科学に頼ろうとするわけです。きっかけの１つは池田菊苗という漱石より４歳年上の化学者がドイツ留学を終えてロンドンに立ち寄ったことです。池田はロンドンのロイヤルインステーションという科学の研究機関で研究をするために立ち寄るんですが、そのときに人の紹介を得て漱石の

下宿を訪ね、1ヶ月半ほど同宿をいたします。このとき、自分とほぼ同じ世代の化学者がドイツで華々しい成果を上げたことに、漱石はうらやましいなと思ったんですね。おそらく文学の研究と違って、サイエンスの研究というのは、国境を越えてコスモポリタンにできると。だから、結果が明晰に出てくると。何を言ってんのかごちゃごちゃ分からない文学とは違うんだという印象をものすごく強く受けるんです。それで、行き詰まってるところを打開するために、活動を文学書を読むんじゃなくて、科学の研究の方にシフトしたいと考えるようになったんじゃないかなと思います。

奥さんにあてた手紙の中にもこういう一節があります。「最近は文学書を読むのがいやんなっちゃった」。「詩なんか読んでも何だか分からない」。「分かった振りをするのは金がないのに金があるような振りしてる人間と同じだ」っていうようなことを言ってるんです。文学書を行李の底に詰めちゃって、今何を読んでるかっていうと科学の本ばかり読んでる。一生懸命シコシコとノートを取ってハエの頭ぐらいの小さい字でノートをたくさん作ってる。これを土産にして日本に帰って一大著作をものしたいようなことを書いているのです。

日本に帰ってきまして、東京帝国大学で英文学の講義をする。それを、今申し上げましたように文学論と文学評論にまとめるんですが、文学評論の中にこういうふうに書いてるんです。「世間一般の人は文学と科学っていうのはまったく異なる活動であるというふうに思ってる」。ところが、「自分はそうは思わない」って言うんです。「文学の研究も科学的にできるんだ」と言うわけです。普通の人はそう言われても納得しませんね。わたしも納得しません。だから、納得させるためにレトリックを使って漱石はこういう説明をしてるんです。これ、漱石がよく使う常套手段なんです。たぶん自分で考えたんだろうと思いますけれども、彼の著作を読んでるといろんなところに出てきます。ある種ムキになって人がなかなか納得しないことを論破して理解させようと思うときに使うレトリックなんです。

こういうふうに言ってるんです。世間の人は文学は科学じゃない、科学的に文学なんか研究できるものかと言う。しかし、そうじゃないと言ってるんです。「花は科学ではない」。「鳥も科学ではない」。しかし、「植物学は科学じゃないか」って言うんです。「動物学は科学じゃないか」って言うんです。分かりますか。「花は科学じゃない。しかし、植物学は科学である。鳥は科学じゃない。しかし、動物学は科学じゃないか」。同じように「文学は科学じゃない」。しかし、「文学の研究は科学だ」と言ってるんですね。これ、スッと読んじゃうと、漱石を信奉してるファンっていうのは多いですから、ああ、そうなんだなと思っちゃうんです。騙されちゃいけないんです。何がうまいかっていうと、A は何々である。B は何々であるっていう、そこで共通の概念を作っちゃうんです。同じだなと思わせちゃうんです。そこでポンと話が飛ぶんです。

花は科学じゃない。鳥は科学じゃない。文学も科学じゃない。そうすると、花と鳥と文学が同等に扱われるように思っちゃうでしょう？　そうすると、植物学は科学である。動物学も科学である。このように、ポーンと飛ぶんです。文学の研究も科学じゃないか。そうはいきません。そうはいかないんです。これは、論理的におかしいところが 2 つあります。気がつきますか？

まず、科学というのは人間の知的営みを指しています。漱石が文学評論の中で使った言葉を借りると活動になるわけです。実験をする、観測、観察をする、数理的解析を施す。そこから普遍的な法則を導き出す。そういう営みがサイエンス、科学なわけです。

それに対して、花とか鳥っていうのは、科学が研究する対象なんですね。研究対象です。つまり、実体なんです。物なんです。ですから、鳥は科学じゃないとか、花は科学じゃないってそれだけ言われると、ああ、そうかなと思うわけです。確かに花は科学じゃないですね。鳥も科学じゃない。そうかなあと思うんですけれども、これは一般的な表現に置き換えると、いかにめちゃくちゃかっていうことが分かります。実体は営みじゃないって言ってるんです。これ、何の意味もありません。あるいは言う必要のないようなことなんです。ですから、そこでレトリックを使って、何とか強引に文学研究も科学にしたいと思ったんですね。

レトリックをどこまで意識してたかはよく分かりません。よく分からないけれども、たぶん何とかやりたいけども、自信がどこまであるかなあっていう、揺らぐ気持ちがあったんじゃないかなあと思います。それで、こういう方法を使ったんでしょうね。

科学の研究方法っていうのは、真理をつかみ出す手段として人間が見つけた最もパワフルなものだと思います。ですが、これは研究対象の性格に規定されてるんです。

近代科学が生まれましたのは、だいたい17世紀に入ってからのことです。ですから、実験をするとか、観測、観察をするとか、数理的な解析を施すという、現在の科学の手段のベースになってるものっていうのは、17世紀になってから編み出された手法なんです。それまではないんです。だから、別の言い方しますと、それまで今、われわれが認識してる自然科学という学問、知的営みはなかったと言ってもいいと思います。

あるとき、たとえばガリレオだとか、デカルトだとか、ニュートンだとかが出てきて、今言ったような科学的な方法をある特定の対象に施すと、法則を見つけ出して解析がうまくいくっていうことが気がついたんですね。つまり、何かの法則を発見した、万有引力の法則を発見したとか、落体の法則を発見したという個々の発見の事例だけじゃなくて、科学的な研究手段というものが、ある特定な研究対象にすごく有効であるっていう発見があったんです。ですけど、これは研究対象の性格がガラッと変わっちゃうと、万能性はありません。何でもかんでも使えるわけじゃないんです。ですから、文学の研究をするときに、科学的な手法を持ってきても、どだい無理なんです。

文学研究に行き詰まったとき、漱石はまだ若いときですから、ロンドンに行って一人で悩んでて、なんとかそこを打開しようと思って新機軸を打ち出そうとした意気込みは買いますけども、それをどこまでも強引に引っ張ってこうとしたときに、こういう失敗をするんですね。今言ったように、Aは何とかである。Bは何とかである、Cは何とかである。だからと言って共通の概念を持たせといて強引に結論を持ってくるということは、決してうまくはいきません。

漱石は人生の前半は、英文学の研究者の立場だったと思います。後半は、自分が作品を作るという立場になって、言ってみれば、研究対象になっちゃったわけです。ですから、100年経っても、これだけ漱石の研究書っていうのはたくさん出てるんだろうというふうに思います。

幸か不幸か、英文学の研究をやるという立場を捨てて、つまり、東京帝国大学を去って、朝日新聞の専属の作家になった結果、今言ったような誤解を強引に突き進んでいく失敗を避けられたんだろうというふうに思います。良かったと思います。

つまり、そのまま、帝国大学の教授になっちゃって、こういうわけの分からないことを強引に、立場上研究を続けてると、彼の人生は非常に寂しかっただろうと思います。実作家になったおかげで、たくさんの名作を生み出して、われわれは今、それを楽しんでるわけです。だからそういう意味で言うと、後世の人間にとっても幸福だったですけれども、漱石自身にとっても良かったと思います。

今言ったレトリックは漱石の常套手段で、これは作品を読みますと事例はいっぱいあります。だいたいどういうとき使うかというと、ムキになって人に反論したかったり、それから世間の常識を打ち破ろうとしたいときに、漱石はこの手段を使うんです。彼は反骨精神が非常に旺盛でしょう。権威を有難がって、それに従うというような姿勢をものすごく嫌いますね。

漱石は、ちょうど40歳のとき東京帝国大学を辞めちゃう。朝日新聞に入るわけですね。今だと大学を辞めて大新聞社に入るっていうことは、それほど奇異な印象を与えないかもしれません。しかし、当時は帝国大学の先生の職を捨てて、新聞社に入るっていうことは相当に常軌を逸したことだろうと思うんですね。今日の後援に朝日新聞も入っていますが、別に朝日新聞の悪口を言ってるわけじゃありません。当時の世相としてはそういうことだろうと思うんです。ところが、漱石はあえてそういうことをやります。つまり、教授の地位なんていうものに対しては執着しない、それ有難がってるっていうのは、世間一般の人間がおかしいんだっていうことを言うわけです。

有名なのは、博士号辞退事件です。あれは明治44年つまり、朝日新聞に入った後のことです。今、博士号というのは、大学が授与します。ただ、当時は、文部省つまり、お上が博士号を出してたんですね。漱石は学問にしても芸術にしても、評価をするのは、それを鑑賞する人がすればいいんだと考えていたわけです。あるいは、学者の仲間内で評価すればいいんだと。お上の権威を持ってそういうことを評価するっていうことはけしからんという基本的な姿勢があるわけです。だから、文部省から博士号を

送るって言われたときに、「いらん」って言うわけですよ。そのときに担当だった福原鐐二郎という文部省の学務局長は、大学予備門で漱石と同級生なんです。つまり、学生時代からの知り合いなわけです。だから、頭抱えたと思いますよ。まさか、そんなこと言ってくるとは思わないのに、「いらない」と言うわけですね。「自分は今までただの夏目某で生きてきた。だからこれからもただの夏目某で生きてくんだ」っていう名セリフを吐いて啖呵切ったわけでしょう。福原局長はおそらく頭抱えて、「あいつは若いときから変わんねえなあ」とぼやいたんじゃないかなと思うんですけれどもね。そういう反骨精神が旺盛です。

そういうときにも、今言った文学評論で使うレトリックを盛んに活用しています。朝日新聞に入ったときに入社の辞という文章を書いてるんです。今申し上げましたように、世間の人からは「何で東大の職を投げ捨てて新聞社なんか入るんだ」って言われるわけで、もうそれがカチンときちゃうわけです。親戚からもワーワー言われるわけです。「金ちゃんは拗ね者だ」なんて言われるわけです。だから、そこでこういうふうに書いてるんです。「新聞屋が商売ならば、大学屋も商売だ」。これ、さっきと同じでしょう。「花は科学じゃない。鳥は科学じゃない。文学も科学じゃない」と言ってるのと同じなんですよ。「新聞屋が商売ならば、大学屋も商売だ」と。ここまではいいとしましょう。大学屋がわたしも大学屋の一人だけど、あんまり商売っていう感じはないですけども、「新聞屋が商売なら、大学屋も商売だよ」。そこまでいいでしょう。そうするとまた次にポーンと飛ぶんですよ。新聞屋が下卑た商売ならば、品性のない商売ならばってことですね、下卑た商売ならば同じように大学屋も下卑た商売じゃないかと。何が悪いんだって言うんですね。これ、やっぱり論理的にはおかしいですよ。下卑てるか下卑てないかっていうのは、その職業の内容やそれを営む人間の行動によって決まるわけですからね。一括して新聞屋が下卑てるとか、大学屋が下卑てるっていうふうにひっくるめて言うことはできないと思うんですけれども、そういうことを言ってる。

だから、これも世間の常識を打ち壊そうと思ってムキになってると、こういう論法を使うんです。『草枕』という作品があります。山道を登りながらこう考えた」っていう、冒頭は非常に有名ですね。「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」。非常にリズミカルでテンポの良い文章です。

この先、また使うんですよ、レトリック。気がついたことありますか？　これ、有名な書き出しなんだけど。「人が作った人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい。あれば人でなしの国へ行くばかりだ。人でなしの国は人の世よりもなお住みにくかろう」と。つまり、人の世に住んでるしかないじゃないか、仕方がないじゃないかと言ってるわけです。今の言葉で言うと、人間はさまざまなストレスを抱えるわけですよ、皆さんもそうだろうと思います。そうすると、どこかにくつろぎを求めたくなります。くつろぎを求めるために、詩が生まれたり絵が生まれたりする、芸術の価値があるということを言ってんですね。だから、結論は良いと思いますよ。

だけど、今読んだところですり替えてるの、分かりますか。「人の世が住みにくいからとて、越す国はあるまい」。ここまでは良いんですけれども、「あれば人でなしの国へ行くばかりだ」と。これ、「人」っていうのはどっちも共通してるんですね。人の世と人でなしの国。人が共通してる。しかし、人でなしというのは、人の世の反対語ではありません。「この人でなし！」なんて怒鳴ったときは「ひでえ野郎だ」っていうことでしょう。人の世の反対語っていうのは、あるのかないんだか分かんないけれども、動物の国か人のいない国っていうことですよね。そこをうまく人で「なし」って言う、「なし」っていう言葉に注目して持ってきちゃってるんですね。そこに気がつかないでスーッと行っちゃうと、確かに人でなしの国っていうのは住みにくいよなと読んでしまうわけです。そうすると、その先、漱石の術中にはまっちゃうんですね。

漱石の研究書や論文っていうのはダンプ何台分もあるから、こっちも忙しくてそんなもん全部見てませんけども、こういうすり替えでおかしいっていう指摘をした人っていうのは、いるのかいないんだか知りませんが、少なくても気がついたことはないです。これは必ずしも悪口だけ言ってるわけではありません。うまいんですよ。文章のテンポが非常に良い。だから、スーッと吸い込まれちゃうんです。それから、さっきの新聞屋だ、大学屋だっていうような話も、啖呵を切ってるような威勢の良いところがあるでしょう。だから、そうすると、だいたい反骨

精神でお上の権威をひっくり返そうと思って啖呵を切るなんていうセリフを聞くと、やんややんやって拍手を送りたくなるでしょう。そこで引きこまれちゃうんですね。

権威のことですけれども、博士のこととかそれから教授になりたくないなんていうことですけれども。たまたまさっきこれ見てて気がついたんですが、皆さんのお手元にあるパンフレットですね。裏に「開催にあたって」って書いてあります。そこに門下生の森田草平に宛てた手紙の一節が引用されてますけども、3行目のとこかな。「余は吾文を以て百代の後に伝へんと欲する野心家なり」って書いてありますね。これは自分の気概を込めた良い言葉だと思います。これは、まだ東京帝国大学にいるときですね。ですから、専業作家になろうと自分で決心をしたときの心境を表したんじゃないかなあというふうに思うんですが。実際その通りになってますね。今日でも漱石の作品というのはこれだけ読まれてるわけですから、「余は吾文を以て百代の後に伝へんと欲する野心家なり」。その通りになったわけです。

この手紙の「開催にあたって」に引用されてる前の部分に、何て書いてあるかお読みになった方いますか。すごいんですよ。「百年の後百の博士は土と化し千の教授も泥と変ず」って書いてあるんです。だから、わたしなんかもうとっくに土か泥になっちゃわなきゃいけないなって思う。つまり、博士になったってえばったり、帝国大学の教授になったといってふんぞり返ってたりしたって、そんなものは歴史の中に残りゃしないといっているわけです。
今だけの話だと。たいした価値はないと。本当の価値は、作品を残してそれが100年の後、100代の後、人に評価されるどうかで勝負がつくんだと。真価が問われるんだっていうことを言ってるんです。ですから、権威主義に対していかにムキになったかっていうことが分かると思うんです。

さっき博士号辞退事件のことをちょっと触れましたけれども、門下生やそれからロンドンにいるとき、奥さんに宛てた手紙の中なんかで、しばしば博士を毛嫌いする表現が目につきます。悪役にしてるんですよ。『虞美人草』に小野くんっていう帝国大学を主席で銀時計をもらって卒業して博士論文を書いてるっていう登場人物がいます。この人は確か孤児だったのかな、世話になった人の娘さんと結婚することになってたんだけども、だんだんそれが嫌になってくるんです。そこで博士論文を理由にして、結婚を延ばしてる。これも博士になる、博士になるっていうことを盛んに書いてるんです。漱石は、貧しい人間がある人の世話になってエリートの階段を登り始めようと思ったときに、何も博士ばっかり持ってこなくてもいいだろうと思うんですよね。ほかの進路や職業を選んだ人間を小説の中に登場させてもいいと思うんですけれども、博士だ、博士だっていうことを言ってるんですね。

自分もその博士になんかなるつもりがないとか、そういうものをありがたがるのはいけないということをいろんな人の手紙に書いてますけれども、これも森田草平宛ての手紙だったように記憶してるんですが、こういう啖呵切ってるんです。「漱石は乞食になっても漱石だ」って言ってるんですね。

確かに、教授や博士になる必要はないと思いますよ。別になったってたいして偉かなんかないんだから。だけど、何も乞食にならんでもいいでしょう「乞食になっても漱石は漱石だ」って。これ、たとえが極端なんですよ。だから、いつもムキになると、こういう論調を使うことがよく分かると思います。

寺田寅彦っていう漱石の門下生がいます。熊本の第五高等学校で漱石が英語の先生したときの新入生です。年齢が11歳しか違いませんので、最初の出会いは先生と学生だったんでしょうけれども、その後の付き合い見てるとちょっと年の離れた親友っていうふうな感じです。とても仲が良いです。この近くの早稲田南町で漱石は晩年を過ごすわけですけれども、記録を読むとほぼ毎日のように寺田寅彦が漱石の下を訪れてます。

彼は一流の物理学者ですから、科学のいろいろな知識を漱石にも伝えたんだろうと思います。それがさっき言った『吾輩は猫である』の首縊りの力学だとかニュートン力学の話になって出てくるんだと思うんですけれども。寺田寅彦は漱石が亡くなったあと、追悼文の中にこういうふうに書いてるんです。漱石先生は文学者としては珍しいぐらい科学には関心が深かった。特に科学の方法論的な研究に関心を持った。ゆくゆくは自分も文学の研究に科学の手法を取り入れたいと思っていたようだけども、創作活動が忙しくてついにそれができなかったっていうことを書いてるんですが、これはさっきわたしが指摘したことに基づきますと、寺田寅彦のおべんちゃら

です。彼は一流の物理学者ですから、物理学の研究方法っていうものがどういうものかっていうのは分かってたはずです。ですから、漱石に向かって、「先生それは無謀です。意味がありません。おやめになりなさい」と言うべきだったと思うんですね。

だけど、追悼文にそう書いてるっていうことは、褒めようと思ってるわけでしょう。生きてるときにおそらく、「やめなさい」ということは言わなかったんだろうと思うんです。これは寺田寅彦に責任取れって言っても無理ですけれども、やはりそれだけ親しかったんであれば、漱石の活動について関心があったんだとすれば、そういう指摘をすべきだったというふうに思います。

というわけで、40歳を機に、漱石は研究者から研究される側ですね、創作活動に移るわけです。一転して、文学の科学的研究というのは失敗に終わっちゃったことを悟るわけです。

あとで、ずっとあとになってからですけれども、学習院で行った「わたしの個人主義」っていう講演があるんですが、それを読みますと、自分で失敗したっていうことは言ってます。文学論や文学評論は自分がやったことの亡骸であるとか、今だとちょっと差別用語になるような表現を使ってますが、書いてます。それから、地震で壊れた市街地の廃墟のようなものだっていうことを書いてます。完全に自分のやったことが駄目だったということに気がついちゃったんだと思います。

一方、小説家になって、作品を書くようになると、これは科学の知識、内容を文学作品の中にうまく溶け込ませてます。もう30年以上前なんですけれども、『猫』の首縊りの力学の原著論文、1866年にサミュエル・ホートンというイギリスの科学者が、「フィロソフィカル・マガジン」というイギリスの科学の雑誌に発表した「力学的、生理学的に見た首吊りについて」という論文を読んだことがあるんです。タイトルはちょっと物騒ですけれども、これを読んだことがあるんです。『猫』の中に、力のつり合いの式が出てくるんです。たくさんダーって、三角関数使って。そのサミュエル・ホートンの1866年の論文を、わたし見たときに、その式が出てるんですよ。あのときはちょっと感動しましたね。漱石と同じじゃないか。考えてみりゃ逆だった。漱石はそれを写したんですけれども。

漱石が英語を読めるのは分かりますけれども、ただ英語を読めたって物理の内容って分かんないでしょう。たとえば、皆さんだって日本語で物理の本を読んだって分かんないでしょう。ですから、それを換骨奪胎してうまく咀嚼して小説の中に溶け込ませたということは、科学に対する知識、それから理解力が深かったんだと思います。

『猫』の飼い主の苦沙弥先生ん家の隣に落雲館っていう中学校があるんです。そこで野球の練習をやってるんです。生徒の打ったボールがしょっちゅう苦沙弥先生の庭に飛び込んでくるんです。幸いに、障子破って部屋の中へ入ってきて苦沙弥先生の頭にぶつかるということはないんですけれども、しょっちゅう庭に落っこってくる。生徒が「すみません。取らしてください」なんて入ってくるとうるさいわけです。そこで、苦沙弥先生が学校に文句を言いに行くという場面があるんです。『猫』はさっきちょっと触れましたように、そこでニュートン力学使って何でボールが飛んできて、もうそのまま障子を突き破って自分の部屋の中に入ってこないのかっていう説明をちゃんとしてるんですね。面白いですよ。物理の理論を場面に合わして、活かしてユーモラスに表現するということは、内容を分かってないとできないと思います。

それから、もう一つ有名なのは『三四郎』っていう作品がありますね。田舎から帝国大学に入学するため上京してきた若者の青春物語です。そこでも野々宮宗八っていう物理学者が登場します。三四郎の同郷の先輩なんです。上京したばっかりのときに同郷の先輩を訪ねていく。物理学科の実験室に行くと、光線の圧力測定っていう実験をやってるんです。光の圧力を測るという。これ、当時実際に行われてた実験です。これも寺田寅彦から論文を借りたんだと思います。

わたし、それも読んだんです。やっぱり30何年前に。そうすると、ああ、分かってたんだなと思う。つまり、『三四郎』の中に漱石が書いた実験の情景、やり方と、それから原著論文っていうのはアメリカの「フィジカル・レビュー」という雑誌に載ったニコラスとハルという物理学者の実験の論文なんですが、それ読んで比較しますと、ああ、ちゃんと読んで内容を理解して、咀嚼して書いてるなあというのは分かりました。実験装置が書いてあるんですけどね。光の圧力を測定する「福神漬のような缶が置いてある」って書いてあるんです。

フィジカル・レビューに載った論文見ると、アメリカじゃ福神漬っていっても通じないと思うんだけども、なるほどそんなような容器が置いてあるんですよ。『三四郎』の中では「ウワバミの目玉のようなものがキラキラ光ってる」と書いてるんですけど、キラキラ光ってるというのは2つの雲母でできた円盤なんです。そこに光をあてて反射させ反跳を捕らえて、光の圧力を測ろうという工夫をしてるんですが、なるほど、論文を読むと、そうなっています。

だから、多少は寺田寅彦のレクチャーを受けたり、「君ちょっとここよく分かんないけど、おせえてよ」っていうようなことを言ったのかもしれないんですけれども、まったくチンプンカンプンだったらそれは理解できないでしょう。ましてや作品に使おうということはないと思うんですけれども、漱石には物理を理解する知識はあったんだと思います。

ですからその点で言いますと、寺田寅彦が追悼文に書いてるように、「文学者としては珍しく科学に対する関心が深かった」っていうのはあってると思います。

いちばん作品の中で科学をうまく活かしたのが、今日の午後のテーマになってます『明暗』だと思います。『明暗』に津田という主人公出てきます。新婚6ヶ月。やな奴ですね、この男。わたし、大嫌い。「豆腐の角に頭ぶつけて死んじまえ」って怒鳴りたくなるような、やな奴。ずるいですよ。優柔不断。キョロキョロしてる。津田が結婚するつもりで付き合っていた清子さんっていう、美人の元恋人が心変わりして、ほかの男と結婚しちゃうんですね。自分は今の奥さん、お延さんと一緒になるんです。結婚して6ヶ月後、津田は、「痔の手術をしなさい」って病院でお医者さんから言われるんです。そんな奴だからバチあたったんじゃないかと思うんですが、誰だって、「手術を受けなきゃいけない」って医者から言われれば気が滅入りますよね。

そういう書き出しで『明暗』は始まるんですけれども、病院から帰る道すがら、津田はこういうことをグダグダ言うんです。数日前に友人からポアンカレーというフランスの科学者の「偶然」っていう話を聞かされたって言うんです。ポアンカレーってご存じですか？19世紀の終わりから20世紀のはじめにかけて、数学、それから物理学、天文学に活躍した、言ってみれば万能選手です。時代がアインシュタインと重なるんでやや世間一般の人からの知名度は落ちるんですけれども、アインシュタインに匹敵するぐらいの超大物です。

この人が1908年、『明暗』を漱石が執筆する8年前に『科学と方法』という本を書いてるんです。その中に、漱石が『明暗』に使った「偶然」という文章があるんです。この「偶然」という文章を寺田寅彦が1915年、つまり漱石が『明暗』を書く前年、翻訳をして、今もうなくなっちゃいましたけれども、『東洋学芸雑誌』っていう雑誌に載せてるんです。だから、漱石は寺田寅彦からその翻訳をもらったんだと思うんです。読んだんだと思うんです。

それがインスピレーションになって『明暗』を書いたかどうかは分かりませんが、作品を通して、伏流水か通奏低音に感じるようにポアンカレーの「偶然」っていう文章が流れてくんです。

ご承知のように『明暗』はものすごく長い作品です。漱石の作品の中でいちばん長いです。長いけれども、未完で終わっちゃってるでしょう。大作が未完で終わると読んでる人間の欲求不満っていうのは大変なものですよね。ヴィーナスって腕ないでしょう。左腕は肩からないですね。右腕も上腕からしか残ってない。あれ、どういうポーズとってたんだろうって知りたいですよね。でも、腕が出てこないことには分かんないよね。シュミレーションする以外にない。

『明暗』の場合はまだ書かれてないから、あったものが失われたわけじゃないですけれども、完成品としてあるべき部分がないという点では同じですよね。だから、ヴィーナスの腕を探すみたいにいろんな文芸評論家がこういう結末になるんじゃないかっていうシュミレーションをしてます。実際に書いちゃった作家の方もいますね。こういうふうになるんだっていう。だけど、シュミレーションは所詮シュミレーションなんで、結局欲求不満が消えないんですけれども、このポアンカレーの偶然を冒頭の部分、新聞の連載で言うと2回目ぐらいのところですかね、使ってるんです。

病院を出て、帰る道すがら手術しなきゃいけないと暗い気持ちのときに津田がこういうことを言うんですね。「いわゆる偶然の出来事というのは、ポアンカレーの説によると、原因があまりに複雑過ぎてちょっと見当がつかない時に云うのだね」。「ナポレオンが生れるためには或特別の卵と或特別の精虫の

配合が必要で、その必要な配合が出来得るためには、またどんな条件が必要であったかと考えて見ると、ほとんど想像がつかないだろう」と。次に、こういうことをグダグダ言うんです。「どうしてあの女はあすこへ嫁に行ったのだろう」。あの女って清子さんですよ。自分を捨ててほかの男と結婚しちゃった人。次は自分のことも言ってるんですよ。「このおれはまたどうしてあの女（お延さんのことね）と結婚したのだろう」。そんなの知るかっていうんだ。自分で考えろって言いたくなるでしょう。つまり、去っていった恋人には未練たらたら。新婚6ヶ月の奥さんがいるにもかかわらず、結婚したことに対してまだ迷いがあるってこれ最低ですね。そういうふうにグジャグジャ言ってて、そのセリフの中で「偶然」、ポアンカレーのいわゆる複雑の極地、何だか分からないって分かるわけじゃないじゃないかって言いたくなるんです。

場面がずっと展開してって、これも冗談めかして言うと一種の偶然かなあと思うんですけれども、未完に終わった新聞の連載の最後のところです。もう本当に面白くなってくるところで終わっちゃってるんですけど。津田と清子さんを引き合わせた吉川夫人っていうでしゃばりおよねみたいなおばさんがいるんです。津田の上司の奥さんなんです。この奥さんがまた余計なちょっかいを出すんです。清子さんは流産をして静養に温泉に行ってたんです。吉川夫人はそれを聞いたわけです。そこで津田にけしかけるんです。「清子さんのいる温泉宿に行って、わたしから預かったって言って果物カゴをお見舞いに届けて、それで再会のきっかけができんじゃないの」っていうようなことを言う。良くないよね、こういうの。姦通をそそのかしてるわけです。

するとまた、津田っていう奴が豆腐の頭にっていうような男ですから、ホイホイとのっちゃうんです。旅費や滞在費は吉川夫人に出してもらう。未練のある女性に会えるっていうから行っちゃうわけです。それで、最後の場面ですけども、温泉宿の清子さんの部屋に果物カゴをぶら下げて部屋に入って行くんです。清子さんは当然びっくりしますよ。何で来たんだろうと。ましてや吉川夫人っていう人からお見舞いの品までもらって。

だから、怪訝な顔して質問するわけですけれども、そのときのまた津田のセリフがずるいんですよ。「偶然ということも世の中にはありますよ」。ここでまた偶然を持ってきてるんです。冒頭に言ったポアンカレーの「偶然」がここでまた頭を出してくるんです。これ、偶然じゃないんですよ。策略を講じて清子さんのとこに会いに行ったわけです。人智の及ばない原因が複雑に絡まってよく分からなくなって、ある結果が出てきたことを「偶然」とわれわれは言うわけですね。津田の行動は、偶然じゃないんです。計算に計算を重ねて訪ねてってるわけですから。

考えてみれば、かつての恋人といったって人の奥さんになってる人ですからね。若い女性が温泉宿に一人でいるときに、男がその部屋にノコノコ入って行くっていうこと自体が非常識でしょう。するべきじゃないんですよ。それをしただけ、これは姦通の入り口に自分で足踏み入れちゃったっていうことです。

百歩譲って、そうするんだったら、男だったら本心を言えっていうんですよ。そうでしょう。自分の思いを、あなたを今でも諦められないと。自分は結婚しちゃったけども。本心をぶつけんなら、ぶつけんだって良くないよ、それは人の奥さんにそんなこと言うのは。良くないけども、まだ救いはあると思う。ところが、偶然って世の中にありますよね。自分も手術のあとで静養しようと思ってこの旅館を探したらたまたまあなたがここに来てるっていうのを吉川夫人から聞かされて云々なんていうことを言うわけですよ。だから、世の中には偶然なんてことがありますよなんて、嘘っぱちばっかり言ってるんです。

結末がどうなるかっていうのはもちろん分からないんですけれども。連載はかなり長くなってます。それから、漱石は誰宛てだったかな。名前忘れちゃったけれども、亡くなる１ヶ月ぐらい前、「『明暗』は長くなるばかりで困ります」って手紙に書いてるんですね。「来年まで続きそうです」と。「本になったら読んでください」って書いてある。これをどう解釈するかはなかなか難しいんですけれども、おそらくそろそろ終わるよっていうことを言ってんじゃないかなあと思うんです。自分の健康状態っていうのは、漱石は何度も大病してますからね、ある程度自覚はあったと思うんですよ。そうすると、「本になったら読んでください」っていうことは、そろそろ終結に向かって出版しますよという意識がどこかにあったんじゃないかなあと思うんです。

この時点で、登場人物はもう全員出揃ってます。彼らのキャラクターやパーソナリティ、立ち位置っていうのも全部詳しく書かれてるわけです。お互いの関係、相関っていうのも詳細に記述され尽くしてます。そうすると、結論がどうなるかっていうことなんですよ。つまり、そこからみんなシュミレーションを文芸評論家なんかしてるんです。わたし、いちばん面白いなと思ったのは大岡昇平のシュミレーションです。大岡昇平は純文学作家ですけれども推理小説も書いてますから、そういうのは得意だったっていうか、面白いなあと思って書いたんじゃないかなあと思うんですけれどもね。

ポアンカレーの話にちょっと戻りますけれども、ポアンカレーが言ってる偶然です。これは何かっていうと、当時、蔓延してました、ニュートン力学に基づく決定論という自然観にもとづいています。

ニュートンの運動方程式という式があります。ここにある情報をインプットして計算を実行すると、自動的に答が出てくるんです。自動販売機みたいなものなんです。ただし、さっき言いましたように、その自動販売機を使えるのは研究対象が科学の研究方法に合致する属性を持ってるものじゃなきゃ駄目です。文学研究は駄目です。ニュートンの運動方程式はそこに何をインプットするかっていうと、たとえばリンゴでもいいですし、落雲館の生徒が野球の練習に使ってるボールでもいいですし、あるいは月の動きでもいいですし、惑星の動きでも何でもいいんですけれども、調べたい物体の運動状態、つまりいつ・どこにいて・どういう方向に動いてるか・どういうスピードで動いてるかっていう情報を入れて、それから、そこに作用する力、ほとんどの場合は重力ですね。万有引力。それを入れて、計算をチャカチャカチャカっとすると答が出てきちゃうんです。その答は、計算さえ間違えなければ誰がやったって同じ答が出てくるんです。ノーベル賞物理学者がやっても、早稲田の１年生がやっても、同じ答が出てくる。これはすごいことですよね。つまり、初期条件って言うんですけれども、原因を設定すると、結果は一意的に出てくるんです。原因と結果が1:1 に対応するんです。これがニュートン力学の特徴なんです。

つまり、ニュートン力学で記述されるような現象に関して言うと、偶然っていうことは起こりえないんです。必ず必然になっちゃうんです。結果が決まってるから。ところが人間は、特定の範囲内ではニュートン力学使って計算できますけれども、森羅万象や人間の心の動きや社会活動全般まで、計算できませんよね。つまり、津田が言う複雑な要因がいっぱい交じり合って、些細な要因が大きな結果を引き起こすと。

これ、バタフライ効果って言うんです。だから、分からないわけですね。

ですから、ポアンカレーが言ってるのは何かっていうと、世の中は、本質的には必然なんだ。偶然っていうのはないんだと。だけど、人間の計算能力、あるいは情報収集能力っていうのが、限界がありますから、全部分かるってわけにいかない。だから、原因が全部掴めなくて計算できなかった結果が出てきたときに、「あ、偶然だね」って言うんだって言うんですね。

もし、ニュートン力学を完全に駆使をして、宇宙全体の情報を瞬時に取り入れるようなことができるスーパーインテリジェンスですね、超知性というのが存在するとすれば、彼は計算しちゃうわけです。ニュートン力学使って。そうすると、偶然っていうことは起こりえない。結果っていうのは 100％分かるっていうことなんですね。

これを言ったのは、ポアンカレーより 100 年ぐらい前、フランスのラプラスっていう大数学者です。この人は、ニュートンの力学を微積分を使って非常にスマートな形に書き直した人なんです。だから、偶然だっていうのは人間の無知の証であるということを言ってます。今はそういう自然観はないですよ。物理学者でもそういうことを考える人はいませんけれども。二十世紀のはじめ、ポアンカレーが「偶然」を書いた頃、漱石がたぶん寅彦の翻訳を通して読んだ頃っていうのは、そういう絶対的決定論っていう自然観が蔓延をしてたんです。それを津田は使ったんです。

だから、漱石はそこまでは理解してたと思います。理解してて、『明暗』の冒頭にポアンカレーの「偶然」の話を持ってきたと思うんです。最後のところで旅館の部屋で津田が清子さんと会ったとき、「世の中には偶然っていうことがありますよ」なんて嘘ついていますけどね。ここでも使ってるでしょう。

だから、さっき言いかけましたけども、初期条件は小説の中でもう完璧に固まってると思うんです。

そこから、温泉宿の中か、温泉宿の周辺で、何かの破局が起きるんじゃないかなあという気がするんです。そして、結末を迎えたとき、漱石は冒頭に引いたポアンカレーの「偶然」のセリフを津田にもう1回吐かせるつもりであったのではないかと思います。

さっき、『猫』のニュートン力学の話とか、首縊りの力学の話とか、『三四郎』の光線の圧力測定の話とか出しましたけれども、これはこれでうまく作品の中に取り入れて文学を豊かにしてると思うんです。そういう点ではうまいと思うんですが、必ずしも首縊りである必要はないですね。それから、光の圧力の測定である必要はない。ほかのテーマを持ってきても、それを換骨奪胎して、うまく溶け込めせれば、同じような効果はあったと思うんです。

『明暗』の「偶然」の場合はそれを超えてると思います。作品全体を包んでるんです。だから、これをどこまで読み解いてくかっていうことを掘り下げてったらまた新しいシュミレーションができるんじゃないかなというふうに思っております。

時間がだいぶ過ぎちゃったんですが、まとめますと、結局漱石は確かに寅彦が言うように文学者としては珍しく科学への造詣が深かったし、関心が深かった。そこで二面性が出ちゃったんです。一つは文学の研究を科学的にやろうとして失敗しちゃった。しかし、文学作品の中に、科学の内容を溶け込ませるっていうことは、おそらくほかの作家が成し得なかった技を発揮して、作品を興趣豊かなものにしたんじゃないかなっていうふうに思ってます。それをトータルで考えると、漱石の面白さっていうのはまた味わい直すことができるんじゃないかなっていうふうに思っております。どうも、ご静聴ありがとうございました。